ラムダナ

西條

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ラムダナ

【Ｎコード】
Ｎ３２２２Ａ

【作者名】
西條

【あらすじ】
４７歳のニュースキャスター、井上龍航と１７歳のお馬鹿な女好き、庵名輝友。二人の男は訳も分からず異世界へ連れていかれ、魔術士になった。龍航は２７歳の体に若返り、庵名は推定Ｆカップの女に。二人に課された使命は魔術を濫用する主権国家、紀能国を滅亡させる事だが…。

プロローグ1～世代交代のニュースキャスター、４６歳井上龍航の始まりの話

東京に記録的な大雪が降ったのは、つい昨日の話。

降雪量は約３メートル弱。交通機関は全てマヒ。会社や学校も勿論全て閉鎖。

嘘みたいな話だが、この狭い東京で既に十何人か遭難しているらしい。

「嘘みたいだよなぁ」

龍航は一面の銀世界をテレビ局の４階から見渡す。高２の冬に行った修学旅行先、北海道をも彷彿とさせるその眺め。

「井上さんの地元じゃ滅多に見れないでしょ？こんな光景」

そう言って、プロデューサーの槙原が横からコーヒーを差し出した。

「あぁ」

ちなみに井上龍航の地元は、九州福岡県の平野部になる。

「井上さーん。スタジオお願いしまーす」

遠くからＡＤの呼ぶ声がする。そろそろリハーサルが始まる時間だ。

朝８時の民放のニュースキャスター。放送開始から今年で１７年目。

最近社内からは番組打ち切りの話が出てきた。

『世代交代』、らしい。

「井上さん」

槙原がスタジオに向かう龍航の背中に叫んだ。

「フリーになるって話…本当ですか？」

龍航からの返事はない。その代わり、長年愛用のライターを渡した。

「それ、やるよ」

「え？」

龍航は来月で４７歳になる。社内では冗談混じりなのか、それとも皮肉を込めてなのか『長老』と呼ばれている。

この場所では、既に限界があった。

そして、その限界の先を自分の眼で確かめたいと思った。

「世代交代、ってやつだな」

それが、龍航の答えだった。

プロローグ2～女好き、17歳庵名輝友の始まりの話

「な！山田っ！見たか！！さっきのニュース！」

学校が臨時休校になった少年は、手持ち無沙汰に自室から友人に電話をしていた。少々興奮気味だ。

「すげーの！
バターンってさ、いきなり白目になって倒れてやがんの！椅子から転げ落ちてさ！スタジオちょー大騒ぎで！そしたら『しばらくお待ちください』って画面が出て…
…あ？名前？
えっと…井上た、た……タコ？
ちょーオヤジなんだけど…

あぁ？そいつ死ぬかって？

んなもん俺に聞くなよ。
死ぬんじゃねーの？
けっこーやばそーだったし」

少年は笑いながらポテトチップスを口に入れた。

少年は、どこにでもいるごくごく普通の高校生。

巨乳のグラビアアイドルが大好きで、ＲＰＧゲームが大好きで、メールが大好きで、電話でのおしゃべりが大好きで。

そして振り出しに戻るが、やっぱり何より、三度の飯よりも巨乳グラビアアイドルの事が大好きで。

本当に、ごくごく普通の健全な高校生だった。

「あーぁ。言いたい事言ったらスッキリしたや。じゃーな」

少年は電話を切る。

庵名輝友。都内の私立高校に通う2年生。
先月彼女に振られ、まだそのショックから立ち直れていない。

「あー、ヒマぃ」

先月買ったゲームも全てクリアした。漫画も全部読み飽きた。テレビは大雪のニュースとトレンディードラマしか放送していない。勉強なんかする気もない。

「…もしかして、」

窓を開けて下を見下ろす。
団地の1階部分は雪に埋もれているが、2階にまでは被害が及んでいない。
庵名の住む階は、2階。1階の大林さんと松長さんは、近所のコミュニティーセンターに昨晩避難した。

親からは『外には出るな』と言われているが、庵名にはそんな事など関係なかった。

『楽しくなけりゃ人生じゃないじゃん！』

それが彼のモットー。

そう。

彼は自他共に認めるおバカさんなのだ。

「いぇーい！」

庵名はベランダから外に出た。一面の銀世界。誰もいない。うるさいガキも、ジジィも、犬も。

思う存分庵名は白銀の世界を満喫した。

３メートルの雪は街の景色を全て変える。それが庵名には新鮮だった。

「トモエのバーカ！」

ちなみにそれは元彼女の名前。

距離にして何キロ走ったのだろう。団地は見えなくなっていた。

「…さむっ」

防寒対策をしっかりしていても、やはり自然界の偉大なる力の前には無力だった。

眠たい。お腹減った。寒い。眠たい。お腹減った。寒い。寒い。寒い…。

庵名は回れ右をすると、自分の元来た足跡を辿っていく。

ニュースでは、この狭い東京で既に何人かが遭難した事を聞いた。

それを思い出して、庵名は一瞬身震いした。

…まさかね、そう自分に言い聞かせ、歩調を若干早めた。

歩き始めて約１０分、突然背筋に悪寒が走る。

外寒いもんな、当たり前だよな、と庵名は自分の中でそれを繰り返す。

「う……」

頭が、痛い。しかも割れるように。
全身が怠い。
耳鳴りがひどい。
動悸が早くなる。

さっきまでの快晴が嘘の様に、激しく強く轟々と雪がふぶいてきた。

まずいかもしれない。そう庵名が思った瞬間、耳元で誰かが囁く声が聞こえた。

『　　』

強い吹雪の為、上手く聞き取る事ができなかった。
空耳かもしれないと考え、また歩みを再会しようとしたその瞬間

『君を待ってるよ』

視界が、段々と黒くなる。
筋肉の弛緩した身体が、冷たい雪の上に倒れる。
意識が遠退いていく中で、今夜のテレビに大好きなグラビアアイドルのあいちゃんが出演する事を思い出した。

あ、俺、死ぬかも。

自分の葬式でトモエは泣いてくれるのだろうか、そんな事を考えながら庵名はゆっくりと意識を手放した。

《青砂の降る国》1

目を覚ますと、龍航はベッドの中にいた。

赤い絨毯に赤い壁紙、緑色のシーツとカーテン。
明らかにクリスマスカラーのそれらは、起きたばかりの龍航の目には少々キツい配色だった。

「趣味の悪い病室だな…」

それが、目覚めて一番始めに口にした言葉。
自分がスタジオで生放送中に倒れたのは覚えている。頭痛だったか、胸の痛みだったか。

とにかく凄まじい痛みの波が全身を襲ってきて、龍航はあっという間に飲み込まれてしまったのだ。

自分がこうなってしまった以上、明日からのニュースは誰が原稿を読むのだろう。

このままだと、おそらく降板確実だろう。

いや、それよりも打ち切りの方が先か。

とにかく意識が戻った事を看護師か医師に知らせたくて、龍航は枕元のナースコールに手を伸ばそうとした。

が、しかし。

「…あ？」

本来あるべきのナースコールがない。
そこで初めて龍航は、この病室の異変に気がついた。
医療機器も、テレビも、洗面台も、照明もない。

ベッド以外、この部屋には何もなかった。

巷で無駄を徹底的に省くシンプルスタイルが流行っている事は知っていたが、まさか病院にまでそれが浸透していたとは…。

「この病室の広さだとテレビ局の近くのＦ病院か…」

もしくは郊外のＴ病院か。どちらとも有名な高級感溢れる病院である。

だが、その予想はすぐに外れた。

「…馬？」

微かに耳に届くのは、何頭もの馬の嘶く声。そして、足並み揃えた行進の重低音。

ここは競馬場の近くなのか、はたまた自衛隊駐屯地の近くなのか。

龍航は急いで緑色のカーテンを開け、下を見下ろした。

「……は？」

眼下に広がるは、明らかに時代錯誤と言える鎧姿の集団だった。

西洋風の鋼鉄の鎧を身に纏った集団がざっと１００人以上はいる。

《青砂の降る国》２

嘘だろう？

信じられない光景を目の当たりにした龍航は、そのまま窓から一歩二歩…と後退っていく。

”ドン！”

途中、背中が何かにぶつかった。
おそるおそる振り返ってみる。

「お目覚めですか？」

背丈は龍航より頭半分小さいと言ったところか。１７０ｃｍが妥当だろう。珍しい濃い紫の髪は、肩より若干長めで、頭には白い帽子。それには、何やら厳かな装飾が施されていた。
服装も、とにかく凄かった。

袴なのか着物なのか…。昔、世界史か日本史の教科書で見た事ある様な服装だった。

「…あの…」
「はい？」

声も顔も、それなりに若かった。見た目から判断すれば、２０代前半位かもしれない。

「病院の方…でしょうか」
「いえ？スンウですけど？」

は？

訳が分からない。
訳が分からない。
訳が分からない。
訳が分からない。
訳が分からない…

「あの…ここは秋葉原ですか？それとも、その様な催し物が近所で行われているのですか？」
「『その様な』と申しますと？」
「…コスチュームプレイ、と言うやつです」

以前、番組で取り上げられた話題の中の一つ。
テレビや漫画に出てくる人物の衣装を、そっくりそのまま作り着たりする事らしい。
最近では遊園地自らが主催し、コスチュームプレイヤー同士の交流をはかる事を目的とした催し物もあるらしい。

「『こすちうむぷれい』…？
ここは城内で、私はスンウです」

…ダメだ。

話が全く噛み合わない…。

そう確信した龍航は、この男との意思の疎通を諦めた。何を言って

も無駄だろう。そう観念したら急に全身の力が抜け、疲労困憊のオーラが部屋中に漂い始めた。

夢であってほしい。

龍航は軽く自分の頬を両手で叩いてみた。

後に残ったのは鈍い痛みと、壊れたスピーカーの様に『スンウです』としか言わない男の姿だけだった。

《青砂の降る国》３（前書き）

見知らぬ土地で目覚めた龍航（某ＴＶ局ニュースキャスター：タッコウ：４６歳）は、城の関係者である壊れたスピーカーのスンウに連れられて、嫌々ながら『謁見の間』を目指す事になりました。

《青砂の降る国》3

「もうじきで謁見の間に着きますから！」

「…はぁ」

「頑張って歩きましょう！」

「…はぁ」

「自分に負けないで！どんなときも！」

間違っている。

言葉の使い方が、絶対に間違っている。

スンウという男の励まし方は、どこか龍航の癇に障り、そしてまたどこか、何年か前に流行したザードやマキハラの曲を彷彿とさせた。

こいつ、天然だな。

龍航はそう直感した。絶対に後輩にも先輩にも上司にも友人にも仕事仲間にもしたくないタイプの人間だった。

とにかく、謁見の間までの道程が果てしなく長かった。同じ城内なのに、歩いても歩いても歩いても歩いても辿り着かない。

下手したら、自分の所属するテレビ局より広いのかもしれない。

そんな中、テレビ関係者ならではの、あるベタな考えが龍航の頭の中を過ぎる。

「…もしかして『どっきりカメラ』ですか？」

「いいえ？私はスンウで、ここはまだ謁見の間じゃありませんよ」

「…」

わざとじゃない。スンウは、本当に壊れたスピーカーそのものだったのだ。これが天然の恐ろしさ。

『お前の名前はもう聞き飽きたよ』

心の中でそう呟き、先頭に立って意気揚々と鼻歌を歌いながら歩くスンウの背中を睨んだ。

龍航の絶対に、絶対に、絶対に受け付けないタイプの人間だった。

「…あれ？」

『謁見の間』へと歩く途中で何かに気付き、立ち止まる。歩みを止めた龍航に気が付いたスンウが、何かあったのかと声を掛けた。

「…何か普段より体力があるなぁ、と思って」

「そりゃあ、僕は毎朝城下を走ってますからね」

「いや。お前の体力じゃなくて、俺の体力の話」

普段の龍航なら、この距離を歩くだけで目眩や動悸、息切れがおきるはずなのに。昨年スキーの時に痛めた左足膝の関節からも、鈍痛が襲うはずなのに。

なぜか身体が弾んでいる。このまま１０キロは歩けそうな勢いだ。だが途中で『あぁ、夢だからか』と、半ば無理矢理納得しかけた龍航を、スンウが笑った。

「そりゃあ、貴方は若いですからね。それぐらいでヒィヒィ言われたら困りますよ」

「『若い』って言われても…４６歳ですよ」

「よ、４６歳なんですか！？」

スンウが目を真ん丸にして驚いた。信じられない様な顔で龍航を見ている。

『俺って、見た目より若く見えるのかな』

と、勝手な自惚れに走る龍航に、スンウが恐る恐る口を開いた。

「老けてますねぇ…。折角そんなに若いのに。本当に、本当に…老けてますねぇ…」

「…は？」

憐れみの視線の余韻と、なんとも不可解かつ不躾な言葉の名残を龍航に残し、スンウはまた歩みを始めた。

『…とにかく、だ。夢なら早く醒めてほしい…』

身体的な疲労は皆無だが、精神的な疲労がピークに達した龍航は、溜息をつきながらゆっくりとスンウの後を追った。

身体が、少し重くなった気がした。

やっとの思いで着いた『謁見の間』。
思ったよりも質素な入口に、なぜか神社の狛犬を連想させる置物が扉の端と端に2体構えられていた。

『ここからは、できるだけ礼儀正しくしてくださいね。…でないと殺されちゃいますから』

耳元でそうこっそり囁いた後、スンウが勢いよく扉を開けた。

「陛下、ただいまお連れしました！」

そこには5、6人の人間しかいなかった。そしてそれらは、現代日本じゃ信じられない様な髪の色をしていて、やっぱり変な服を着ていた。

「スンウ、ご苦労」

中央一番奥に座っていたのが、スンウが『陛下』と呼んだ人物。
しわがれた、老人の声だ。顔は頭に被った帽子から下げられた小さな御簾で、全く窺う事ができない。
しかし、袖から見える節くれ立った指が、その人の人生の長さを物

語っていた。

「馬鹿者！陛下の前ぞ！頭を下げぬかっ！」

そういきなり龍航に怒鳴りかかってきたのは、『陛下』の右側に座っていた黄土色の長髪の若い女。顔つきは凛々しく、スタイルの整ったなかなかの美人だ。怒鳴らなければ相当美人なのに、と龍航は口惜しく思った。天は二物を与えず、なのだ。

「よいのだ、スロマチ。この者はまだ何も知らぬのだから」

「…失礼しました」

『陛下』に諭され、恐縮したスロマチはそのまま黙ってしまった。これが『陛下』と呼ばれる人間の威厳。

「そなた、名を何と申すか？」

「…井上龍航です」

「イノウエタッコウ、か。…呼びにくいのぅ。『タコ』と縮めて呼んでも良いか？」

「それは絶対に嫌です」

ぴしゃり、と言った。
その場の空気が、シン…と張り詰める。そして龍航は、右側から何かとてつもない邪悪な負のオーラが発せられるのを感じ取った。
変な汗が頬を伝う。
息が詰まる。
心臓の鼓動が聞こえて来る。
恐る恐る振り向いた。

やはり。

スロマチが物凄い形相で睨んできたのだ。怖じ気ずいた龍航は『やっぱりタコでいいです』と、呆気なく折れてしまった。

「時にタコ。そなた、ここがどこだか分かるか」
「え？……夢の中」

小声でそうつぶやいた龍航を、再びスロマチが睨んできた。今度は腰に携えた禍々しい剣に手を掛けて。
それを見た龍航は命の危険を察し、慌てて訂正した。

「とっ、東京じゃないですか？」
「トウキョウ？なんじゃそれは」
「え…日本の首都…」
「二ホン？なんぞや、それは？」

「はあぁ！？じーさんボケてんじゃな…ヒィッ！」

剣の切っ先が喉仏スレスレに飛んで来た。トロイジャの剣だ。そしてその剣の主の顔は、仁王そのもの。否、東北のナマハゲすら連想させる。

とてもこの世の者とは思えない形相だった。

トロイジャは龍航をキッと睨むと、謁見の間に木霊する程の大声で怒鳴った。

「陛下を愚弄するとは失敬な！よいか小僧！自惚れるなよ！本来お前の様な曲者は、この青砂宮に入る事すら許されぬのだぞ！！」

怖じ気づいた龍航は、その場で尻餅を突く。４０歳も後半の男が、自分より若い女に怒鳴られて尻餅。情けないと言うよりも、腹立たしいと言うよりも、悲しいと言う感情が龍航には先に込み上げてきた。視界が涙で滲む。年をとると涙脆くなるということを、龍航は身に染みて実感した。

「その…トロイジャさん、そんなに怒らないでください。タコさん、泣いてるみたいですよ」

トロイジャは間髪入れず、スンウに怒鳴り返す。

「五月蠅い！スンウ！弱輩者は黙っておれ！」

スンウは首を竦ませて俯いた。体が縮んでいる。
憐れ、助け船は呆気なく海底へ沈んだ。ペリーの黒船対ゴムボート。
勝敗は一目瞭然だった。
スンウは涙目になり、一歩下がってうなだれる。
まるで、捨て犬を家に連れてきて叱られた子供の様だ。

勝ち目のない試合に果敢に挑んだスンウに、龍航はこの日初めて感謝と同情の念を寄せた。

「どこから来たかは分からぬが、この天下に名を轟かせる『青砂宮』。知らぬとは言わせぬぞ！」

「トロイジャ」

その一言で、謁見の間全てが静かになった。

「…よいのだ。余も気にしておらぬ。
察するにタコはこの国の事など全く知らぬ土地の出。致し方ない事

じゃ」

「ですが…」

「我等の頼みなど全く聞き容れぬ青砂の魔女が、重い腰を上げて遥遥遠くから呼んだ者。いわば、我等が招いた客人じゃ」

「…失礼しました」

納得のいかない顔でトロイジャは一歩下がった。

とにかくこれで一安心。龍航は軽く胸を撫で下ろすと、ふうっと一息ついてから重い口を開けた。

「話が…話が全く見えないんですけど。

『せいさぐう』とか『せいさの魔女』とか『客人』とか…。順を追って話してくれませんか」

それを聞いた皇帝が、驚いた声で問い掛けた。

「…お主、『せいさの魔女』も知らぬのか？」

龍航は頷いた。

「そうか…。しかし魔術は使えるであろう？」

龍航は激しく横に首を振った。

「忘年会で『耳が大きくなる』マジックならした事ありますが…」

「……そうか…」

溜息が御簾を越して聞こえてきた。
また謁見の間が静かになる。

「騙されましたな」

陛下の右側で構えていた大男がポツリ、と漏らした。浅黒い肌に、黒髪。大男ではあるが野蛮さ、荒々しさは全く感じられず、どこか気品の感じられる人物だった。腰にはトロイジャ動揺、重々しく大きな剣が携えてある。

「ヘイセイ、ロッポンギヒルズ、バナナマン…。これらはお前の国の象徴物だろう」

バナナマンはさてどうかと思った龍航だったが、大男の問い掛けに素直に頷いた。

「ですが、なぜあなたがそんな事を知ってるんですか？」

「アンナから聞きました」

「…『アンナ』？」

有り触れた名前ではあるが、龍航の知り合いにはいない名前だった。

「一度、貴方が眠り続けてる時に顔を見にきましたよ」

「眠り続けてるって…どれくらい寝てたんですか？」

「6日は寝てましたよ」

「む、6日っ！？」

驚愕の事実を知らされ、唖然とする龍航。

「アンナさんも、貴方が起きて来るのを待ってます。

良かったら、今から彼女の部屋にお連れしましょうか」

《青砂の降る国》４（前書き）

納得のいかないまま謁見の間を後にした龍航は、浅黒い大男に案内されてアンナの部屋を目指します。

「アンナ、入りますよ」

アンナの部屋は、驚いた事に龍航の寝ていた部屋のすぐ隣りだった。
一応断りを述べてから大男がドアノブに手を掛けようとしたら、向こう側からアンナ本人が二人を出迎えてくれた。

「よぉっ！」

右手を上げて気さくに挨拶したその少女は、水色の髪にセミロングのクセっ毛。やや大きな瞳で、龍航程ではないが、女性の中では長身な方である。　美人かと問われれば、美人な方かもしれない。オセロのナカシマとキクカワレイを足して、２で割った様な顔だ。
だが一番龍航の目を引きつけたのは、たわわに実った大きな、胸。軽くＦカップはあるかもしれない。

「触ってみる？」

龍航の視線の先に気付いたアンナが、悪戯に笑ってそう言った。

その言葉に驚き焦った龍航が、滅相もない！と物凄い勢いで首を横に激しく振る。
その動きがあまりに滑稽だったので、アンナは思わず『プッ』と、ふき笑いをしてしまった。

「では私はここで…」

二人のやり取りを微笑ましく見ていた大男が小さく会釈する。漆黒のマントを翻して、その場を立ち去ろうとした。
それに気付いたアンナが、その大男の前に回り込んで両手を広げ慌てて止めに入る。

「アルデラバン、もう帰んの？茶ぐらい飲めよ」
「申し訳ございません。私はこの後マヌリア議会へ行かなければならないので…」
「…そっか」

そこで、龍航は初めてその大男の名前が『アルデラバン』だという事を知った。

「アルデラバンって、ちょーいい奴なんだけどぉー仕事熱心てゆ

ーかぁ、仕事オタクなんだよなー」

アルデラバンが去った後、ベッドの上で胡座をかきつつ、片手で脇をポリポリ掻きながら女が言った。

大ざっぱな、悪く言えばガサツな女性である。やや幻滅する点もあるが、それでもたわわな胸が揺れる度にドキドキしてしまう。もう精力なんて燃え尽きた歳のはずなのに、なぜか思春期街道驀進中の中坊みたいに興奮してしまった自分を、恥ずかしく感じた　。

「ところで、さ」

不自然に目があっちこっち泳いでいる男に、水色の髪の少女が問い掛けた。さっきまでとは違い、かなり深刻な顔で。

「…あんたもさ、『アッチ』では…女だったわけ？」

「…は？」

突然意味不明な問い掛けをされて、ついつい変声期前の様な、１トーン高いボイスが出てしまった。

『あんたも』って事は、この女、元々は男だったのか？オカマだったのか？だからあんなにガサツだったのか？

妙な疑心暗鬼が、龍航の中でどんどんと暗雲を募らせていく。

そんな、なかなか口を開かず怪しげな視線で自分を見つめる男に、内心強い苛立ちを覚えたアンナは、尖った声で再度言い直した。

「アッチでは女だったか、って聞いてんだけど」

「…俺は元から男だけど」

「ふーん。あっそう…

俺もアッチでは男だったさっ！！」

龍航の答えを聞くや否や突然キレた女は、ベッドから乱暴に降りるなりドアへ向かって大股でずんずんと歩き始めた。

もう訳が分からない。一体何が気に食わないと言うのか。

龍航は激しく困惑したまま、一応女を止めに入る。

「ちょっと待て！『アッチ』って何だよ！？」

「はぁ！？」

オマエ、俺のことバカにしてんの？みたいな目で睨んできた。気の短さは、どこかの誰かさん…―トロイジャそっくりだ。

「日本だよ！に！ほ！ん！」

部屋中に女の怒鳴り声が木霊する。

あまりの迫力に、しばらく唖然としていた龍航が、ハッと我に返った。

「『日本』っ！？」

その国名を聞き、やっと話の通じる相手ができたと思った龍航は、怒り狂う女の手をガッチリと掴んで狂喜乱舞する。

部屋中を走り回り、『バンザイ！バンザイ！』と、まるで衆議院議員選挙に当選したかの様に、喜びを体で表現した。部屋中を走り終えると、今度はベッドの上で『やった！やった！』と跳ね回る。

そう言えば昔こんな感じの、葉っぱ一枚で歌い踊るお笑いグループのＣＤがあったなぁ、とアンナは思い出した。

それでも、一人冷めた眼で馬鹿騒ぎしている男を見つめ『ふん』、と鼻で笑う。

それに気付いた龍航が、お前も仲間が出来て嬉しくないのか？と、不思議そうな顔で女に聞いた。て嬉しくないのか？と、不思議そうな顔で女に聞いた。

「仲間が出来たからってさ、帰れるわけじゃねーじゃん」

ごもっともな意見だった。

それを聞いて、龍航は恥ずかしさから体が萎縮する。なんでこんなに自分より人生経験が浅い奴にリアルな真実を思い知らされるのだろうか。もう４６歳なのに。

「あ、そう言えば…」

女が思い出した様に『せいさの魔女』について知ってるかと聞いてきた。

そういえば、龍航は謁見の間でもその名前を聞いた。もちろん知るはずもないが。

「お前、知ってるのか」

女は静かにかぶりを振った。

「ただ、すごく怖い魔女だってはスンウに聞いた」

「あぁ、スンウか…」

再び聞いた、壊れたラジオの名。その顔を思い出すだけで、龍航はゲッソリ萎えた気分になってしまう。

「そのスンウが教えてくれたんだけどさ…」

アンナは龍航に寄り添うと、耳打ちした。

「…どうやら、その『せいさの魔女』が俺達をここに連れて来たらしいぜ」

「なー、スンウ。まだぁ？」
「あと少しで着きますよ」
「あと少しって、どれくらい？」
「はい？僕はスンウですよ？」
「…」
「アンナ…だからスンウと話すなって言っただろ」

馬車はひたすら西へ向う。そして東の空からは、ほんのりと淡く優しい朝の光が昇り始める。かれこれ半日、馬車に揺られていた。

あの後、二人はスンウとトロイジャに呼ばれ、半ば無理やり馬車

に押し込まれた。理由は分からない。トロイジャに聞いても、スンウに聞いても曖昧な返事しか返ってこなかったからだ。　トロイジャは二人の向かいに座って、さっきから眠りこけている。よほど疲れていたのだろう。小さくイビキも聞こえてくる。
　そんなトロイジャの寝顔を見ながら、アンナが湿った溜め息を漏らす。

「はぁ…トロイジャさんって、美人…」
「何だ？嫉妬か？」
「違うよバカ！分かんねーの？この胸の高鳴りがさ…」

アンナの目はキラキラと輝き、頬はほんのりと赤く染まっていた。
「はぁ？お前、この、おっっっっっかない女が好きなのか？レズか？」
「だから！俺は男だっつーの！」

先ほど、馬車の中でアンナが本名を教えた。漢字で『庵名輝友』。珍しい名字だった。『アンナ』は名字だったのだ。
　でもまだ龍航には、アンナが元は男だという事実がどうしても飲み込めずにいた。
「なぁ、何でお前はタコって呼ばれてるんだ？タコみたいだから？」

馬車はまだまだ西を目指していた。龍航は馬車の窓から外を眺めた。空は完璧には夜を抜け出せずにいる。風が冷たい。

「それは、俺の名前は井上た…

『うるさいっ！！！』

突然、トロイジャが大声で叫んだ。２人は驚いて手を取り合う。トロイジャは目を閉じたままむにゃむにゃ何か言っている。しばらくして、またイビキが聞こえてきた。

「なんだ…寝言かよ…」

龍航は気を取り直し次こそは、と口を開き話そうとしたら、今度は運転席のスンウが二人の間を割って邪魔をした。

「アンナさんタコさん！外を見てください！」

言われるままに二人は外を見る。龍航は半分不機嫌になっていた。

しかし、次の瞬間には、そんな事など全く忘れ去ってしまった。

「わ…」

海だ。
いや、海じゃない。
砂漠だ。

青い砂漠が、遠く果てまで続いている。
海の様な深い青。波の様に、砂漠にも砂の波紋が美しく出ていた。
息を呑むほどの美しさに、二人は終始絶句した。トロイジャはまだ寝ている。

「青い砂で青砂(せいさ)って呼ぶんです。毎春、風にふかれて、この砂漠の砂が僕達の街に降ってくるんですよ。綺麗なんですが、農業には凄く厄介者なんです」
「じゃあ『せいさの魔女』って…」
「アンナさんの察する通り。青砂の魔女は、この砂漠にたった一人で住んでます。
あと5、6分で着きますよ」

アンナは、ふと、修学旅行で行った沖縄の海を思い出した。早朝にみんなで出かけた、あの海。朝の海は神秘的で、優しくて、そしてどんな宇宙の万物よりも偉大に感じられた。
この砂漠は、あの海に似ている。
(まるで全てを飲み込んでしまいそうだ)
アンナの心は、その美しい砂漠にすっかり奪われていた。

だが感動は長くは続かなかった。

《ガガガガッ!!!》

突如、軋む音と共に馬車が急停止する。車内は斜めに傾き、その反動で中の三人は大きく揺さぶられた。タコは頭を打って、小さく

うずくまる。アンナは状況が飲み込めず、ただただ呆然としていた。
そして、トロイジャは目を覚ますと同時に運転席のスンウに向かって怒鳴り込んだ。

「バカ者っ！マヌケっ！ノロマっ！丁寧に停車せぬかっ！！」
だが、あんなに怒鳴られておきながら運転席からはスンウの声は全く聞こえない。不振に思ったトロイジャが、馬車を降り運転席を確認に行く。

そしてすぐに、トロイジャの短い悲鳴が二人の耳に届いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3222a/

ラムダナ

2010年10月9日21時51分発行